

纏頭

ふる遊女に通ふ客の數はかるべからず、それをやめて大門を閉ることあるべきかは、むかしより聞ことなれど、いと不審、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕ばなをやる、これに二義あり、一ツは年わかき時の風流なるさまをいひ、一ツは人に物とらするを云へり、榮華物語花初なをくしき人のたとひにいふ、時の花をかざす心ばえにや、大鏡五花ををり給ひし君達續古事談一時の花にてありければ云々、時めく人をいふなり、義經記に、花をりて出た、せ堀河百首題狂歌に、よみ人一ツ木に二度花をやるものは秋の櫻のみぢなりけり、卜養狂歌集、白蓮枝もなぐすらりけりともきあげてなりもはずばにはなをやり候、諸艶大鑑、から鮭も朽木に二度花をやる、西鶴織留、玄ゆちんの帶、紫皮の足袋にて、花やりしに、温故集に、尼になりて、太秦に住ける頃、か花をやる櫻や夢のうきよもの云々、古へ人のもとへ使をやるに、梓木に玉をつけたるを、持せて、其あるしとせし、これ玉梓の使なり、それより後も、何にまれ、人に物贈るには、草木の枝に付て贈れり、今たゞ金銀などを興ふるをはなといふも、もとは花の枝に付てやりしなり、貞順故實集、勸進能の時、花太刀など遣候事、勿論なり、太刀は如常、右に持て舞臺へさし向ひ候時、座のもの一人、舞臺よりおり候て、請取候、又花は右手に持候、いづれ舞臺の上にて渡し候事はなく候、太刀花其外何を遣候共、かせ者を以て可遣候也、粟田口猿樂記、第四日、六番はて、狂言のほどに、芝居より楓の枝え短冊を結びて、棧敷のこすの内へさし入侍り云々、京童、四條芝居の條、舞臺への花の枝は春にあらずしておかし、東海道名所記に、仕舞柱に贈り遣す花の枝は、舞臺にさしあげて色をあらそびなど見えたり、花の枝に目錄を結つけたるなり、輕口笑、元祿十四年前巾、著よりかね一ツ小粒をとり出し、花に出すと申やられければと有は、今の體なり、但し昔は銀玉をやりし事多し、雅筵醉狂集、打花巾著露的月辨當霞など多くみえたり、一目千軒、紙はなの事、遊所にて花を打とて、紙を出す、是を紙はなといふ、むかしより有こ